

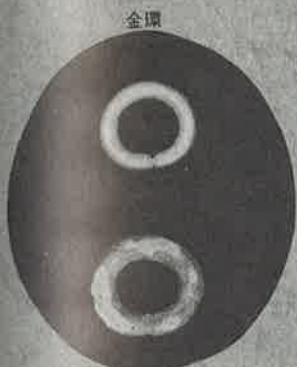
ふるま」と

みのおのおいたち その8

箕面地区(四)

地区の西部は、報恩寺松尾山(通称六箇山)のすそ野台地が高原状に広がっています。その中央あたりに阿比太神社が、台

大谷塚古墳



金環

銅環

地台帳に見える「塚」の地名、また古来の伝承などを考えるとかつてはかなりの数の古墳があったのは確かであろう。稲荷社古墳以外の三基を調査したところ、副葬された須恵質の埴輪と土・カメなどの器類、装身具の金環・銅環が見つかり

ました。おそらく葬った人への奉獻供物でしょう。このうち器類は六世紀中ごろと七世紀前半のもので、作られた時期と埋葬した年代の違うことがわかりました。つまり、三基の古墳は前後の二回、墳墓に使われた家族用のものであったと見られます。

それにしても、小規模ながら巨石で築いた墳墓に葬られ、金環などの副葬品を死後の世界にまで奉獻された被葬者たちは、六世紀から七世紀の箕面地区では最も有力な人々であって、地域の支配者の豪族であり、また氏族だったのではありません。

こうした破格の氏族を祖神に

たたえ、氏神に祀ったのが阿比太神社でしょう。同社の初見は『続日本後紀』の仁明天皇の嘉

祥三年(八五〇年)正月の条で

このとき「従五位下」という神階を授けられています。また延

長五年(九二七年)の「延喜式神名帳」によると「月次新嘗」

条に官幣を賜る式内大社であったこともわかります。今は半町、塚・新稲地区の鎮守社ですが、

元来は箕面地区を本拠地にしてきた古代氏族の氏神社でしょう。そして、氏族は社名や「新撰姓氏録抄」の注記などから阿比太連一族であることがわかります。

古代の大豪族物部氏の系統ですが、古い時代の北摂各地にこの諸氏族が栄えていたことから、その一派の阿比太一族が箕面地方に進出して開拓を行い、この地を基盤にして発展したことは十分に考えられます。

したがって、六世紀から七世紀のころ町田や池ノ内の地に住居を構え、この地にムラを造り生活していた人々は、阿比太氏族を頂点とした集団であったことが推測できます。

こうしてみると、上代のムラ遺跡と古墳・神社は切り離すことのできない「一体」のものであることがよくわかります。しかも単なる上代の記念碑ではなく、箕面地区の上代を生き抜いた先人たちの足跡と息吹きを現代に伝えてくれる、かけがえのない文化遺産でもあります。